シリア難民・パレスチナ難民支援

子どもたちの成長と、お母さんたちを支える

レバノンでは、シリア難民・パレスチナ難民の支援活動を続けています。その様子を報告します。

ブルジバラジネでの給食とクリスマスカード

ベイルートのブルジバラジネ難民キャンプでは11月、パリの爆弾事件の前日にやはり爆弾事件が起りましたが、幸いなことに幼稚園や補習クラスの子どもたちは、全員家族を含めて無事でした。事件から一週間後に子どもたちはクリスマスカードを制作しました。15歳の少女は「レバノンがシリアのようになってしまうのではないかと心配しました。友だちもいるしレバノンが好きです。レバノン人も、故郷シリアの人たちと同じです。レバノン人も、シリア人も、パレスチナ人も、私たちは皆同じアラブ人なのだから、心あわせて協力しあうべきだと思う。」と語っていました。このクリスマスカードは東京での12月のイベントで参加者の皆さんにも配りました。

子どもたちの健康と教育

シャティーラ、ブルジバラジネ、バダウィ、ナハレルバラドの4か所の幼稚園と、シャティーラ、ブルジバラジネ、ワーベルの3か所の補習クラスで600人を対象に給食を提供しています。気温が低い日が続くため、スープなどできるだけ身体を温めるものを用意します。国連の支援が半減し、多くの家庭で食事を取れない日があります。食費を削って生活せざるを得ない状況で、給食により少しでも栄養不足を補うことができるように配慮しています。

シリアからの難民の子どもは約半数が学校に通っていません。UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の学校に通うパレスチナ人の子どもたちも、学校に行っていなかった期間が長い為に授業にほとんどついていけない状態です。補習クラスでは根気よく基礎から教えています。

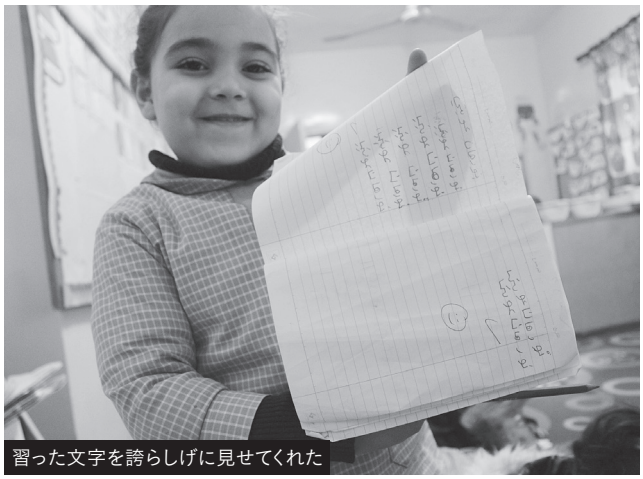
難民キャンプは密集していて、教室は陽が当たらない幼稚園で唯一日光浴できるのが屋上です。天気の良い日、保育士と一緒に遊ぶ子どもたちは本当にうれしそうです。シリアから避難後、年長組から幼稚園にはじめて入ったため、アラビア語の文字を保育士の指導によって少しずつ学んできた子どもも多く、自分の名前をきちんと書けるようになった子どもたちは、自分の名前を書いたノートを、保護者や保育士に自慢げに見せてくれました。

滞在許可のない生活

今年の冬は例年以上に寒く、寒波や嵐の日が続きました。そんな中、ブルジバラジネキャンプで久々に母親ワークショップを行いました。昨年はテロ事件があったりしましたが、現在は落ち着いています。参加した40名のお母さんに暮らしについて聞くと、ほとんどの家にストーブがないため非常に寒いそうです。灯油代が高いので使えないのです。「家に電気ストーブがあ

学校に通ったことのない子にも根気強く

シャティーラ幼稚園の屋上にて


習った文字を誇らしげに見せてくれた

る」と答えたお母さんは20名ほどいましたが、停電が多くてなかなか使えないとのことでした。それ以上に困っているのが、国連からの支援が途切れたことです。

さらに声を揃えて語ったのが、滞在許可証の問題でした。

シリア難民が滞在許可証を延長するには、公安総局に行って、1人あたり200ドル（1年間）を払い、必要な書類を揃えた（約75ドル）上に、さらにレバノン人の保証人を見つけなければなりません。キャンプ内に住む難民家庭のほとんどが、保証人を見つけることができずに困っています。ある家族は、保証人に1人あたり800ドル払うように言われたため、借金をして夫の分だけ更新したそうです。400ドル支払ったのに保証人に逃げられた家族もいました。

滞在許可証を持っているお母さんはいませんでした。「誰も滞在許可を持っていないわ。そんな高い手続き費用は払えない。明日の食費だって困っているのに」。レバノンで活動する国際人権団体によると、滞在許可証がないために検問所で殴られたり、許可証の発行と引き換えに近隣住民の情報提供を迫られたり、保証人になる代償として娘を差し出すように言われるなど、事態は深刻です。

「幸せを感じよう」

母親のワークショップでは「自分を大切にすること」をテーマにしました。2人1組になって、大きな模造紙の上に横たわって身体の輪郭線を描き、「今悲しみに沈んでいる女性に、美しい服を着せて幸せな気分になってもらおう」と彩色をします。伝統的な衣装を着せたり、スポンジを使って躍動感のある塗り方をしたりと様々な表現があり、「子どもの頃に戻ったようでとても楽しい」と、どの母親も終始笑顔です。完成後作品を並べて、互いに良いと思う点について語り合いました。シンプルな材料と手法ですが、等身大の女性を幸せな気分にするという作業に自分の心が投影され、互いに幸せな気分を感じているのが分かります。

お母さんたちのワークショップで作品を見せあう

サイダ地域でも、母親ワークショップを継続しています。「何に幸せを感じるか」「何に悲しみを感じるか」、ゲームを取り入れながら語りあいます。多くの人が、FGC(児童精神科のクリニック) サイダに来て子どもがカウンセリングを受けられることに幸せを感じると語ります。他方、彼女たちが住むアイネヘルウェ難民キャンプでは相変わらず戦闘や事件が続いていることに悲しみや怒りを感じていました。2月末にも離婚問題でもめた夫が妻を射殺する事件がキャンプ内で発生しています。「子どもたちのためにも自分が幸せを感じられるように生きたい」「いつかは旅行に行ったり、自分が楽しめることをしたりしてみたい」という声があり、全員でシリアやパレスチナの歌を合唱しました。ディスカッションの後には、庭で取れたレモンを使ったジャムとチョコレートでお菓子作り。参加した母親たちは非常に貧しい生活をしており、コミュニティで販売できるようになればと思います。12月下旬には乳がんの早期発見と症状についてのワークショップを実施しました。参加者の中に乳がんの経験者がいて、手術によって現在は元気に暮らしているため、他の母親たちにも乳がん検診を積極的に薦めていました。